

# 乳幼少年期の情報通信環境についてのオントロジック的考察

## —育児を中心とした視点—

○氏名 森田英夫 MORITA HIDEO

**Keywords** : 神経細胞の興奮、ホムンクルス、スキンシップ、泣き声、喃語、オントロジック

1 目的：情報通信 IT の発達と社会活動への女性参加を促す世の中の動きのなかで、在宅勤務やモバイルワークで母親がスマホやタブレットやPC（以下情報端末）の画面近くで幼児のケアもするような場合が今後も一層増えてくることが予想される。あるいは幼児がスマホをいじることに興味を示し、取り上げると泣喚く、といったいわゆるスマホ依存症がみられることに対する警告が日本の医学医療関係者からもなされている。そこで科学的な立場から育児を中心にして、誕生直後からの母と子の情報伝達について考察する。

2 方法：本研究の調査・分析方法は、脳の研究者の知見による脳中枢の機能に関する文献調査と育児専門家の知見とを調査し、社会活動の変化をとらえつつ、情報通信におけるオントロジック的考察を加えて分析する。

3 結果：母親の子育て機能（ダッコ・授乳・アヤシ）の習得と赤ん坊の言語機能の習得は、感覚性及び運動性ホムンクルスで図示のように、まず、①体軀すなわち手足とそれぞれの指、舌、喉頭、あごなどを使っての、赤ん坊の機能である哺乳と排泄と泣喚きと母親の子育て機能との相互情報交換から始まる。母親には夫や祖母はじめ身近の人の支援・地域社会・産科医療制度の支援がある。しかし、オントロジックのロール概念で育児、特に出産直後の育児の場というコンテキストでの潜在的 Player には母親しかなく、その相方役が乳飲み子である。

オントロジックでのロール概念では、人類共通のロールとして、母親は「妊娠や出産時の苦痛、親として赤ん坊に食事排泄等のしつけや仕草を教える」ことであり、乳飲み子は「誕生直後から最低限自身の生命維持に必要な捕食（お乳を吸う）と排泄と身体の苦痛不具合を訴え泣喚く」である。二か月もすると聴覚言語らしきものに反応する。喃語アーウーを発する。

② 喃語はやがて、地域文化・言語文化の違いに応じて、ブローカ言語中枢による言語習得の結果、世界では1000を超えるという異言語へのいずれかへと発育変化して、やがてそれぞれの言語による情報交換を行うようになる。

③ 本論文での課題は、ここ10数年来急速に世の中に普及し発展しつつある情報通信端末についてである。その画面には、乳幼少年に身近な育った環境とは異なる映像の世界が現れるが、それと自らの正統的存立基盤との調和が必要で、時にその破滅が社会問題化する場合もあることである。結論：以上により、グローバルな標準という見方で誕生から三か月位までは人類共通な母子関係の情報伝達の在り様を示すことができるが、三か月を過ぎると、赤ちゃんは自立したガラガラ遊びなどやママパパとのスキンシップを伴う遊び（高い高い、引っ張りっこ等）を始める。母親・父親が育児以外のそして家庭外での増える社会的な活動のなかで、幼児のスマホ依存症やWHOで新たな病気として認定された「ゲーム障害」への対処を親子一緒になって進める必要がある。

【主要参考文献】：文献（1）養老孟司著「唯脳論」ちくま学芸文庫 青土社 1998年9月25日刊行

文献（2）松田道夫著 定本「育児の百科（上）5ヶ月まで」岩波文庫 青N111-1 2013年第9刷発行

文献（3）友田明美「その育児が子どもの脳を変形させる」(株)PHP研究所 2019/7/10 第1刷発行

文献（4）佐藤和夫「乳幼児のスマートフォン使用-依存や悪影響に注意-」健康プラザ 企画：日本医師会 No. 516

文献（5）鈴木孝夫「ことばと文化 私の言語学」岩波書店 1999年10月